



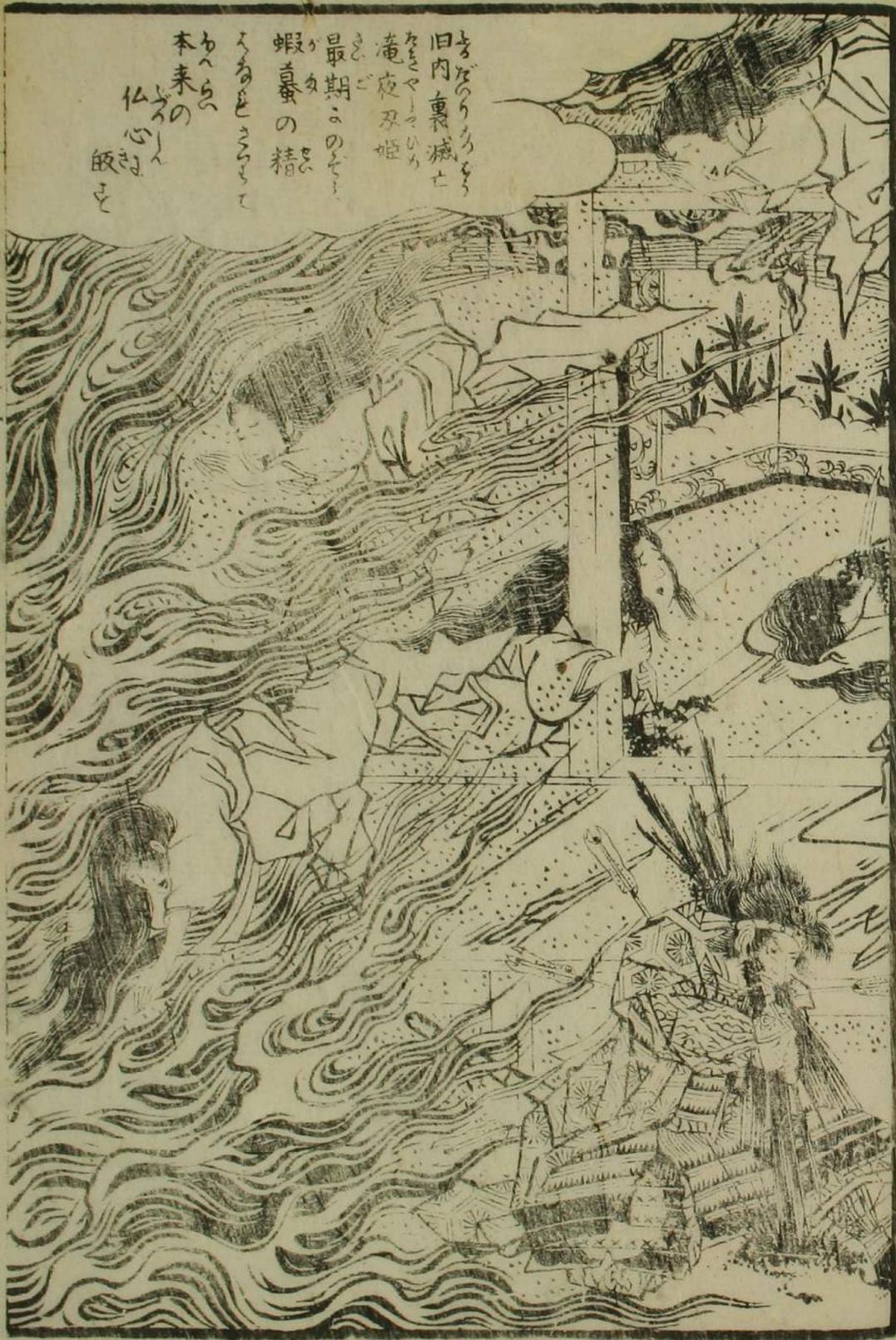
尺四方小横りて累たる郊原の如しは時の野象魔九
六山鷓呀助等三人も腹切ぬ栗鼠早太い生死あれども

絶橋

第十九條



折しも官軍の惣大将精兵とひさめて大庭狭しとこも入ぬ大将の
打扮いくふとわらわ赤地の錦の鎧直垂小唐綾威の鎧の金物重く打
たる透同もたたく着下て竜頭の五枚甲の吹返小日光月光の二天子と
金と銀めて強透しておちると猪項小着成り當家累代の重宝小髭切云
は金作の圓鞘の太刀小豹の皮の尻鞘のけりたる三尺六寸の小太刀以帯漆
産の木白と以て作たる矢三十六指たると苦高小負成白尾毛の馬の大
く運る小笹竜膳と金貝小磨たる鞍と置厚總の鞆の燃立計をどうけ
火の影小耀し光渡りてぞ又たけつとあふふ兵のりこち花やふり



昔ながらの
 旧内裏滅亡
 たるまに
 滝夜叉姫
 最期
 蝦蟇の精
 入るるに
 わへらの
 本来の
 仏心
 飯

善知巻之五

十一

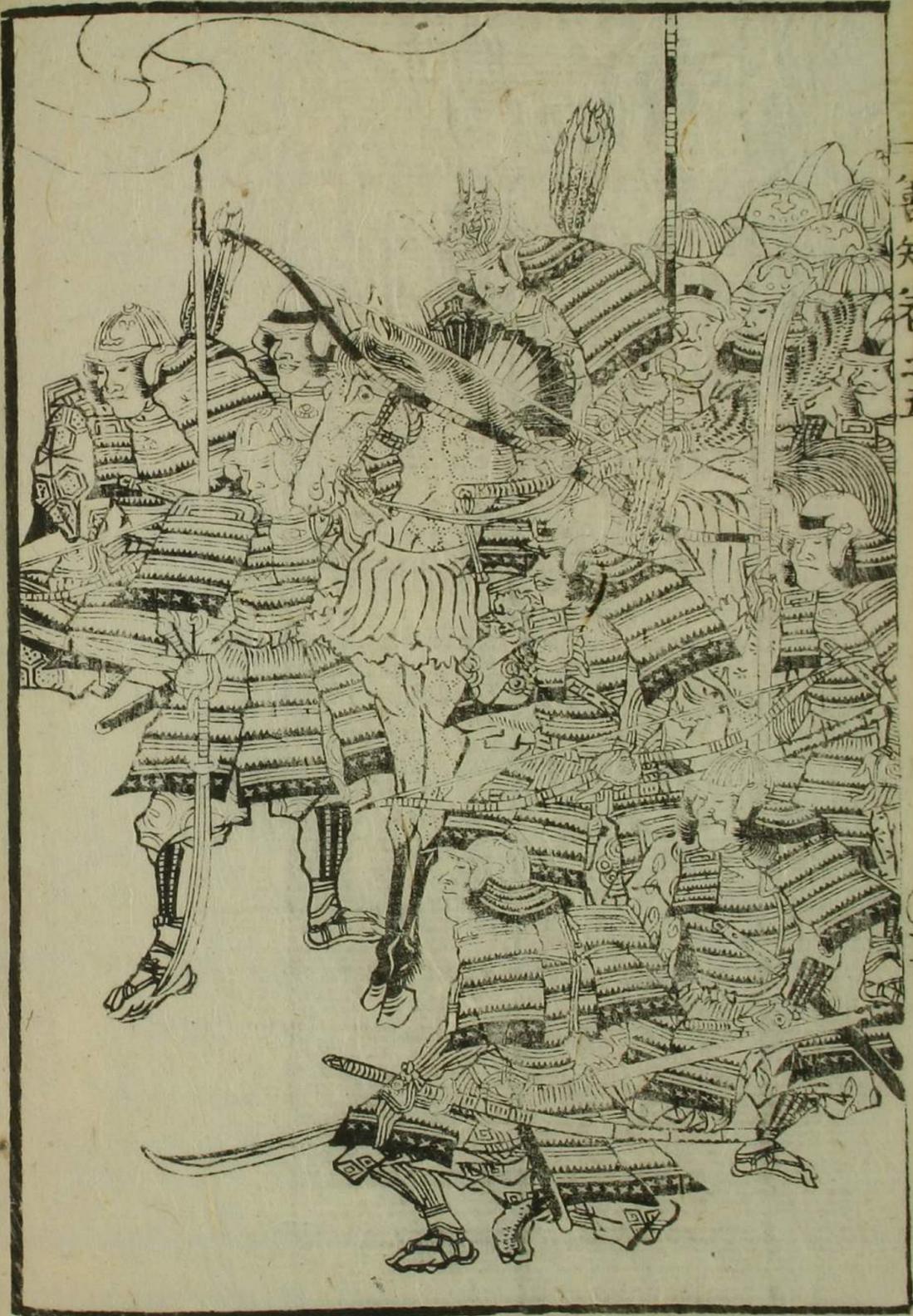


善知巻之五

十六



源の頼信公大宅の太郎
 光国夫婦が忠孝貞節を
 感ずめりて賞以
 せり



善知卷之五

ひきあげたる錦の袋ふ入たる劍了ののど抱たるをさるひて馳来りかの
首級大将の前ふたふて兩人とも平伏を大将より派えむひて汝等ハ
何者も反忠の者ならむとのたまふかの若者のや左ふていゆむを君もか見
知あるはじさか某ハ父満仲公は侍へをりし大宅の左衛門光雅が子同太
郎光国と申す者ありて父光雅満仲公の御勤氣とありて浪の
身となりて先だつて身すうとゆひし生涯のうち御勤氣の御心とありける
ことを深く歎き我死後小汝一功とたて御心とをくらと今般時小じ
のじゆめえ何とぞ一功とたてむと心づけぬが此内裏小妖怪まむとかしと
うとぞとけむりて実の妖怪ありて退治して人民のうぬひとのぞき若又將
門の餘類たる一所為わらむわ捕て微功小せんと此所小きたるころろと
け果して將門の娘のありたるわらむわのりりて味方小つれを不眞深

探りんととらふち幸されり某が妻侍女のうち小交り居ておひてまう
けおらる技完あることを告われ等軍用おたくの火菜と奪りて
あふめえ技完小地雷火と仕つけおれ皆殺せむと計ゆ折し由銅発煩ひ
さ目鉦ありて君御勢とむけむ様子わらむさそのよれ折る謀計暗小合
しぬと森び妻と救出し搦手よと逃出る敵もと如此打りて戦のおらと
待小とつて妻唐衣その尾小つさのさぞお目ふいつらぬと妻ハ家士
藤六左近が娘唐衣と申す者小たんとて父お手打小なりし后あるくの夏夏夏
とさるぬ光国が妻とあり又もあるくの夏目小あひてつひ小如月
尼小とつれ此内裏小移りて侍女のうち小くわらむと逃出へと手段かけ
しは是非ある夏月日とからしゆふと夫小再会し奪ととる陰
の太刀と取入しそのぬ出いと語ておの名劍と大将の尊覽小とらへけり

光国さよふ水无野川あて。羽太九四郎が首を又つけ。その口の裏より出
 たる将門を慰まら祭文の昏と盟昏の起請文の昏と同筆あるとあり
 て。わがまも唐衣此所ふあんと悟るに。果て夫婦再会の時を得たり。
 この西昏の共小荒猪丸が筆跡あるとぞ。かくて頼信公夫婦が物語を言に
 ちされ。さといふあをける。我敵を女とあなどりさるりの計ハあるまどと
 るひつふ。汝若按穴をふさぐむの我われ等以打ちさんこと必定なり。是
 汝が大功あるべ我父満仲ふりり光雅が勘気とゆるとぞ。加藤太夫
 命と一紙の赦免状をかしめて与へけぬ。光国それと押しをに亡父が灵
 を慰まら。六千部万部の経陀羅尼も。さうふすさうたぬりのつらとぞ。
 懐中より光雅が位牌をとり出し。免状をたむけて頼信公の仁心と感
 うれ。涙ふむせびける孝心のやど。ふひでれて哀なり。頼信公唐衣ふむ

うひ。我藤六と手打ち。なること。後悔し。せめて汝等がゆくとたづねて
 家とほがあゆんとあひひぐ。のひふたぐぬあささ。終日來それと愁つふ今日
 えふと。汝ふあひひの。正是藤六が靈魂のみちびれたるふら。さかひた
 せふまれば忠臣を失へ。我一生の誤るるところ。落涙小鎧の袖とぬ
 されけし。唐衣も其志と感して共小涙をおじけて。頼信公くさ。ひて
 光国ふむひ。今うら。あ。ためて汝を我家来とせ。ま。忠勤と励
 よ。藤六が家。他日再奥。得。この。方。あ。の。む。ひ。当。坐。の
 た。力。の。に。て。銀。作。の。太。刀。一。振。を。ひ。く。れ。け。ぬ。が。西。人。感。謝。し。て。ま。た。ふ。こ。と。必。ず。り
 なる。光国又申しける。滝夜刃姫が弟將軍太郎良門と名告。今越中
 山。小。た。て。ら。り。は。此。御。勢。ふ。乗。ど。む。ひ。て。か。こ。ふ。軍。と。む。け。ら。れ。る。や。御
 征伐あれし。某御奉公始。御先仕。人。と。せ。大。將。其。儀。志。く。る。べ。し。と

同意して。たつち小出陳の支度とせむれり。

○此後光国唐衣がなる男カ子出生し。其児成長して大宅光任と名告
頼信の子頼義その子八幡太郎義家二代小仕へ安部貞任征伐
奥州十二年の合戦無比類なるたつちにして義名を千歳小傳々を
つぐ子孫小忠義の勇士とせむれり。正是光国夫婦が忠孝貞節世
ふとくはたふり。天地神明の擁護しあふ所とあはせむ。

小鶴池 第二十條

爰又良門ハ越中立山子引麓野伏浪人とも追々味方へけて合戦の
營の外他夏も専戦場ツケひれの調練して月日とかくつら。頃しも
弥生半めて山の櫻今と盛るれば花残ちあがめ。氣勢を散 下へと伊賀
寿太郎がともめふよと。小賊がるとあさぐて。えもじよに所ふらと。岩上

み毛鬣とまれば。良門ハ猪の皮の志きものの上み坐し伊賀寿の
つぐつぐの野風呂標子吸筒提重とたつちして酒宴
岩下末一味の輩小賊等大勢あゝ居て或ハ清水城々を飯とか一に
木の葉で焼て酒とあゝめ或ハ峯ふのがして獸ととて。杖小入鳥と射
て看ハともつちと折節の一奥あつち。此日晴明の天気あて。空小塵と
その雲もかく。遠山波頭のこくはつちあつち。彩霞錦帳のじくつち
むね。花小ふりもれて。えものれが好景なる。良門伊賀寿
ととも。某御看み昔風と一さし。舞ひんとて立上り。太刀以技で免の頭
ととも。ささみほりぬね
戈變劍戟を奔こと雷光のごとく。磐石富以瓦をう春の雨み

相同然其の心も天帝の身近づくで修羅のれが為小破らる
 こそその心も後みおりのれらが才みまらして大母不吉の詞なり良
 同えたれもの後みおりのれらが才みまらして大母不吉の詞なり良
 中もく奥母八我も一菟と施して又まぶしてと権眼をこそ呪文と唱
 へ印をむすびけぬが忽岩石鳴動し前面の小石ひびくと動くと又へ
 ぱマと数百の蝦蟇と化し左右み列して敵味方をつらち奥鱗みつらり
 鶴翼もそらへるとと上り飛上らしてくひ合けれぬ衣入られ又そある
 奇妙の術と感しあひぬ伊賀寿いづく。太ら兼平二年御父持門君と
 純友殿と同時に在京しむ比叡山みのもを根本中堂の前み酒宴して
 遊びあひりかえりみ平安城を見おらして始て大儀をまじし立むひ本意と
 遂に持門君ハ玉孫なるハ帝王なり。純友殿ハ藤原氏なりハ面白

たりと雨持持約しあひりと同じく今す君と某と此蝦蟇の圃を
 えて盃をめぐらふかの時の趣みく初たり。君帝王となり玉々某面白と
 かんしゆじ。ろろよ死蝦蟇の圃なるこれ幸のト筈なる右と味方み左を
 敵みどくへて勝負の吉凶を口へしと。まだれもせと見居たりして。蝦
 蟇いすもくたぐひ或はくひころまじと倒たりを飛越てまじむあり或
 手負の足みかへて退くもあて。そみ一群がとみ一群とみけり下みなる
 かみりくしつ争ひ血たぐけみたりてくひ合けり。又く味方み左へ
 たり。右の方の大將とみ左の大蝦蟇とみ右のさして地上みたりと其餘の
 蝦蟇へことぐくゆの小石となりみけり。良門これを吃とえて持たる盃み
 撲地とみし。ゆなあやうたるまいゆしきる味方み左とみ大將のくひ
 殺しハ時みそりての不吉ろり。旧内裏みおらと妍うの才のくへきづしきよ

いそぎのひもとつてさう下總とて早打じて栗鼠早大雑鎧着て陳笠
 たぐさふ飛ぶごとくみこしつらき大息つとてしけりさるも一昨夜滝夜刃
 姫花の宴みたりも夜飲を催しあふ折しも敵方のまじしの大宅
 の太郎光国とて者頼信み内通し相害の石火矢をくらちて四方
 をめしぬめ抜穴み地雷火を仕つけて宮中を一面の火とほいび姫君
 逃出あふことあふむつひみ腹うさぬ荒猪丸をくらちて一味の
 面く或は打死し或は自殺し侍女童みゆるまで猛火のうちみ飛入て
 のそむどわろび失し某早走つみ達しなると幸一方を斬ぬけ夜通
 み馳参り御註進仕りゆ途中あせうけむのぬ頼信大軍を起しと
 当山みせむひは御用心あふと息もつとあふむのべたるとわら
 良門伊賀寿をばじりてる居なる輩唯ゆられあふとてひりさ

なる口をさぐる者もちうさけりし良門怒気天みさりのあつと眼の色血の如
 赤くちりその面或は青くなると或は紅み変り頭の汗烟のごとくみたち
 のちり炎のごとく息ひつとてひけり隠謀半みと露頭し婿う
 自害あうつらその本望まげかじ此方とて半途み出て官兵みむ
 合頼信をつみ殺し生膳をくらひて婿うへの修羅の妾執とてさきと
 登り伊賀寿軍の用意せしとてそとせとみせれて太刀あつとて飛
 つんとを伊賀寿おしとも御憤りの理わめども王位をのぞむ御
 月あそ卒尔み軍を起しあふ御思慮浅み似たり一旦とてあふ
 時のゆるを待て本懐をとげむがのうと婿君の御孝養あも相
 ちるべしと諫を同入どのあく当の敵をえちる何安間と過とべに汝同
 心りわ我一人とせむひ頼信が輩を皆殺しとらぬとておれみ

あれて已みたるせのんといたる背後の方み。あれをなまらるる良門あはし
くとい声あも。良門此とあるとらぬ肉芝仙雲中より下りて岩上
みぞまり。寛然としてゆく。我如月尼が胸間みつけ入て仏戒をてふと
改俗をよりて汝み力を合させつるが彼宿善の果報いじく菩提
心滅せざるがまぐつさままゝのことあるほど。最期みのぞとて本来の
仏心み立ちらぬ彼頼信が為み亡くも因縁の志く志むる所あるが
いんともまゝとど。今官兵みむひ合て軍せん石を抱て淵みみ如し。
よく志のびざるが大儀いほつじ。唯よく志のびて時運のいづるを待じ。
我まただちて茨木童子み命に。頼光主従をわろがさんとるにしが。
つひみ茨木渡辺源次綱が為み腕をさうして。辛さ命をさすことなぬ
うぬぬ又浴中み妖怪をあぐりして人民をなませ。今上帝の不徳と

のをも且頼信が行跡を乱して自滅させんとをらししも。藤六左邊が忠義
みよりて志をさげむ。皆是時のいづるなり。志よりこいづる我別小葛
城山の土蜘蛛み命とて頼光と亡さん計策あり。汝一旦此所渡おちて
九別丹渡。あな味方と集時運到来と待て軍と起し。
志る時ハ天下派奪んこと安ん。うらむ。今卒示み軍と起す
ことなるれ又再会の昔あふじといひ終り。中て雲み乗じて飛空けと。
かくて良門肉芝仙の教示みよりて。やりく憤を志のび。あち行つとみ
心と決しけし。伊賀寿太郎いそ。某が手下の阿闍梨太郎とやを
者木曾の山中み寨とぬへて引籠ひ。君小賊等の半と召具され。
此時もろや。あち行五へ某の小賊等の半とみ跡み残り軍
器兵具をころりとさめ。山寨を焼失て。あち追付す。志づらく



高野山非事理の
 旅僧妖気の
 此致するを
 蝦蟇の怪を
 事の後編
 詳か



かの地み御足^{つゝ}はさめらんと。それより便^{たより}よた方へ御越^{つゝ}あはれは伊豫^{いよ}
の熊山^{くまやま}少^{すく}の澤^{さわ}太郎^{たろう}今張^{いまぢやう}六郎^{むつらう}讚岐^{さんせき}少^{すく}の高松^{たかまつ}の蛇^{へび}九郎^{くわらう}同第^{どうだい}熊尾^{くまお}
の新^{しん}六紀^{むつぎ}伊国^{いこく}少^{すく}の田边^{たべ}が一族^{いちぞく}三十七人^{さんじゅうしちにん}播磨^{はりま}国^{くに}法花^{ほっけ}山の架^け沙衣^{さゐ}太郎^{たろう}
備前^{びぜん}少^{すく}射越^{いのこし}原^{のら}今木^{いまぎ}備中^{びちゆう}少^{すく}の松山^{まつかや}の荒^{あらい}四郎^{しじらう}肥後^{ひご}国^{くに}少^{すく}の尾道^{おのちみち}六
郎^{むつらう}安藝^{あゑ}国^{くに}少^{すく}の金剛^{こんがう}十郎^{じゅうじらう}蓬屋^{よもぎや}の四郎^{しじらう}周防^{すおう}少^{すく}の国屋^{くにや}の梶^{かぢ}五郎^{ごらう}長
門^{ちのめ}国^{くに}少^{すく}の秋^{あき}の勘^{かん}六^{むつ}同^{どう}金地^{きんち}丸^{まる}梅根^{うめね}父子^{ふし}杉^{すぎ}兄弟^{けいだい}第^{だい}等^{とう}を首^{くび}に^に三^{さん}道^{みち}
の張^{ちやう}本^{ほん}百^{ひやく}六^{むつ}十三^{じゅうさん}人^{にん}其^{その}外^{がわ}一^{いつ}族^{ぞく}從^{じゆう}類^{るい}のぞふるふいとぬあはれは都是^{とくぜ}純^{じゆん}
友^{とも}殿^{どの}の恩^{おん}以^いてけり者^{もの}ぞもたれば味^{あじ}方^{かた}ふつ久^{ひさ}は必^{かなら}定^{ぢやう}なり。それ
ゆゑへ御越^{つゝ}あはれも自由^{じゆう}にて小^こにて俄^{あわ}小^こ旅^{たび}のよそをひとらふ
まは良^よ門^{もん}志^しろくバこそおち支^し度^{たく}まら折^{せり}も暴^{はう}風^{ふう}嵐^{らん}こおし来^きて
さめくと梢^{こしな}をかじし。善^う知^{しん}安^{あん}方^{かた}夫^ふ婦^ふの灵^{たま}魂^{たま}忽^{たち}然^{ぜん}とあつりれど

の軍^{いくさ}も惡^{わる}企^く非^ひ望^{ぼう}を御^{おん}まらとせられども情^{なさけ}なれ御^{おん}心^{こころ}や。うこそ死^し御^{おん}所^{ところ}存^{ぞん}
とと致^{いた}すつとむと良^よ門^{もん}にられをえて又^{また}来^きりし執^{しやく}念^{ねん}深^{ふか}き奴^{やつ}原^{はら}少^{すく}の条^{じょう}大^{だい}儀^ぎ
の前^{まへ}折^{せり}ゆゑの諫^{いざな}言^{げん}や。そく立^{たち}たくとひつ力を^{ちから}被^ひて斬^{きる}松^{まつ}六^{むつ}忽^{たち}雄^{ゆう}の
鳥^{とり}と化^けしてさも思^{おも}はけむうとふくやととくと鳴^なて空^{そら}中^{ちゆう}み飛^と本^{ほん}ねやとなく
旅^{たび}の用意^{ようい}さうのひけと良^よ門^{もん}伊^い賀^が寿^{じゆう}太^{たい}郎^{らう}母^{はは}つらを告^つあはれこの小^こ賊^{ぞく}を
具^ぐて向^{むか}東^{とう}梨^り太^{たい}郎^{らう}が山^{さん}寨^{ざい}とさうらば山^{さん}づゝひの間^ま道^{みち}みゆらとてから
やれりし

○此^こ後^ご将^{しやう}門^{もん}の妾^{めかけ}桔^か梗^{げい}の前^{まへ}自^じ害^{がい}て将^{しやう}門^{もん}の恩^{おん}を復^{かへ}と支^し附^つて六^{むつ}桔^か梗^{げい}が
原^{はら}の来^き由^ゆ葛^{くわ}城^{じやう}山^{さん}の土^{つち}蛛^{あは}美^み女^{によ}化^けして親^{おや}光^{みつ}みらうは死^しつひみ四^し天^{てん}王^{わう}の
輩^{はひ}亦^{また}亡^なさる支^し大^{だい}宅^{たく}の光^{みつ}国^{くに}忠^{ちゆう}義^ぎの支^し良^{りやう}門^{もん}伊^い賀^が寿^{じゆう}太^{たい}郎^{らう}と共^{とも}み山^{さん}
陰^{いん}山^{さん}陽^{やう}西^{せい}道^{みち}をつて九^く州^{しゅう}み渡^{わたり}りち不^ふ味^み方をあつら播^は州^{しゅう}三^{さん}石^{せき}の奥^{おく}

み柵をのりて立籠多田の城を交けり。頼光頼信の武徳みとりて坂
術マバし永延三年三月二十六日。渡辺源次綱子生捕て誅戮せり。夏
伊賀寿太郎誅み伏夏美丸道心源賢阿團梨の道徳みとり肉
芝仙蝦蟇の術をぶきて滅亡。灵魂石と化し。虫みこれと蝦蟇石と称る
夏善知が子千代童母の敵老熊を孝行の徳せりて源家の臣たり。
富貴栄花をこひひり夏附て善知夫婦忠義貞節の功徳ふりて天堂
み生と歡喜を定むる夏将門良門父子地獄みちりて無限の苦痛をうる
夏滝夜乃姫冥途みちりて将門良門みあひひるむ夏源家敏昌の夏不
至るまで惣て善報惡報の速なる例。悲憤への理と述て後編五冊小詳之他
日鏝持の時と俟得て看べし

作者 山東 京 傳
校閱 山東 覽 山

善知傳卷之五終大尾

附 三

案あり小將門の事跡ハ兼徳の古書将門記を証とす。又將門純友
東西軍鑑あり前太平記將門の一條あり。此書より出或ハ帝王編
年記扶桑畧記平治物語平家物語東鑑盛衰記太平記等の諸
書み往々畧記を良門の事跡ハ前太平記みまじく録せり。其の書
ハ近世の書わりとびた。くみ実ともおわえが。此草紙ハ良門の
由急り。と大路と。善知と云謡曲の趣を徑と。夏孤狂
言綺語みまじりけはら。たり物語なれば。そ。言。歌
舞妓の狂言みひと。く。兒女の徒然。慰。唯善人
一旦衰ること。も再時運のひ。く。みあひ。惡漢一旦盛。り。も。
つひ。天刑を。り。善惡到頭。り。と報。り。道理を。示。

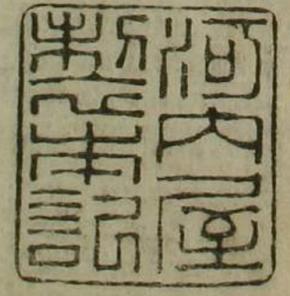
山東先生岩瀨氏本姓拜田名田藏字田藏一
 號醒齋舍東都洛橋南朱提街恒著稗說以
 寓詼諧舉人呼京傳子邨狹巷頰靡弗口之而
 若其名氏間亦有弗諳者因詳標榜編尾云
 東都書舖 僊鶴堂小林近房欽識 囹圄

文化三年丙寅冬十二月發兌

江戸通油町

書林 鶴屋喜右衛門繡梓

群玉堂藏版



大阪心齋橋通博勞町四丁目七番地

岡田茂兵衛



